

禪——根源への入口——

武 田 秀 夫

一

禪仏教は、ありとあらゆるものが根源を徹見し、根源が生きるように生きることを願いとするものであろう。そして、単にその根源を前提にしたり、措定したりすることを避けて、根源の、いわば主体的・個体的ともいふべき、生きた根源の確立が果されなければならないとされている。そこに、禪仏教の大きな特色の一つがある。根源の実在を救済のすべての原点として、それを釈尊の正覚に認めて信じることに於いて、禪仏教もやはり信の立場にある。と同時に、それを起点としながら、根源という普遍性・同一性・本性・一元といった絶対的なものの実在が、一体何であるかにおいて、個人の全体的な全精力が注ぎ込まれて解明・悟得・体認されなければ、意義を失うものと強調されている点に、根源という生きた実在を、いわば生きる実在として生かし切って行こうとする実践的な立場がある。知に焦点を結ばせて、すべてをそこに集約していこうとする、いわば哲学的立場には到底納まり切れぬ立場に立っている。筆者は禪仏教に対しては全くの素人であり、門外漢である。老荘思想を巡る問題で、ある関心を禪仏教に抱いている者であるにすぎない。その老荘も、真実在＝根源を追求するからである。老荘の考える根源とは、人間存在を含ん

だ万物に世界の存在の根拠であり、〈真〉の成立の根拠となっている、ある存在Xである。また、人間にあっては、例えば、〈明〉といった直観的認識能力とも言うべき認識の根拠でもある。この〈明〉等を根拠として、真なる存在である根源(無・道・自然・渾沌・一等等)に冥合して、生きることができるとされている。

では、一方禅ではどうなのであろうか。禅も根源を追求し、根源が生きるように生きようとしている。しかし、禅の背後・土台には、緻密な仏教の教学体系と修行体系が密接不離なものとして控えていて、何ものをも漏さぬ万全の態勢が整えられている。この点は、老荘と大きく違っている。しかし、禅は敢えてそうした教学・修行の体系に身を委ねようとする道を拒否するかに見える。そして今一度、根源に体当りして、それを己のものにしようとするところにおいて、老荘とはまた違った根源への道を豊かに切り拓いていると思われる。根源を巡る問題において、禅仏教が老荘よりはるかに個性的であるのも、そのことを意味するものであろう。

ところで、禅仏教で、如何に真正の見解が強調されても、それは真理とされるものへのひたすらなる信への、没入だけではないようである。また同じくひたすらなる坐禅への、没入だけでもないようである。戒・定・慧一体とされるのも、教学的にはどうなるのかわからないが、それだけにそこには、禅定に依拠しての、しかし禅定には納まり切れぬものとしての禅仏教の形成の鍵の一つがあるのかも知れない。禅定を他から切り離して、それを全体の中で確定したり、あるいはそれから独立させたりするのではなく、いわばそれに集約させる形で禅定を打ち出してきたのは、一体何故なのかの問題である。

禅定に、戒や慧を取り込み集約して、禅定を深いものとして、いわば根源として生きるあり方として浮上させたのは何であつたのであろう。それ自体根源的な把握であつたと思われるが、一つは単純なこととして言えば、禅定には何もものもいらぬと言ふことであるのかも知れない。定められた知識など無用だとばかりに、全てを拒絶して無視して坐っている姿を、真の生ける仏心のあり方の根源として捉えただけであつたのかも知れない。汝は何者ぞ。仏心を

生きる坐禅者・修行者なり。それだけから出発したのかも知れない。

しかし、禅定の体験は外からは見通せないものとするなら、少しく視点をずらして、これも同じく外からは窺い知れぬ、見性の方へ目を向けることにしたい。こちらの方が、筆者にも概念的にはあるが、とっかかりがありそうに思われるからである。

そうすると、こちらからは少くとも禅は、ただひたすら一瞬一点の見性に全身を賭けるものとして、浮び上ってくる。長くて辛い修行を一瞬の見性に賭けると言うのは、また、その見性をば、一瞬一点の出来事のように考えるのは、大きな誤解であるのかも知れないが、見性の修行とは、やはりその前後がはっきりと分かれる一瞬一点の特異・特別な出来事のように思われるのである。それがたとえようもない喜びの時であるのか、たとえようもない程の恐れの時であるのか、また何であるのか、ともかくそれは広大無辺な空間と、長久無限な時間とが、個の一瞬一点に凝縮された、その時、空である他に、他のあり様のないものとして考えられるのである。

少くとも禅はそうした一点一瞬が蔽存するのだ、と考えていることは確かである。この裏にも表にも、先にも後にもならぬ、無の如き瞬時とは、筆者にも救いの原点・根源であると信じられる。この瞬間・瞬時が、何時・何如なるものとして起ることになるのか、またそれが、阿頼耶識を根拠にしているのか、法身や仏心や仏性や如来蔵をそれとしているのか、般若の空をなのであるか、縁起の空をなのであるか、はたまた無明をなのであるか、筆者にはわからないことであるが、しかし一瞬の、いわば聖なる時・空ともいうべきものであることが信じられるのである。そこでは、自分が自分でなくなっている、と考えられる。

この自分が自分でなくなるとは一体何なることなのか。実は、これが筆者にとって最もわからないことなのである。見性とは、あるべき本来の自己を徹見すること、あるいは仏心が仏心なり仏性なり、自性清浄心であることを悟ること、等とされるが、一瞬我れを見失ってうろたえた時に、電流のように流れた何物かが、あるいはそれかも知れ

ぬと思えば、筆者にもよく納得のできることはある。現実の固い壁に、突然ひび割れが走って、現実がつまづいた瞬間である。論理の場においては一層そうであるのかも知れない。あの瞬間はそれとして流れているのであろう。一点一瞬の見性での本来の自己とは、そんなひび割れた自己のことであるのかも知れない。そんな一瞬一点にぶち抜かれて、バラバラになってしまふことであるかも知れない。

禅のこの瞬間・時間に対する過敏な反応は、理論といわれるものの独り歩きに対する敏感な反応と根を一つにしていよう。無時間な真理の内実を、瞬時という時間に染めあげて、ヒョイとつまみ出されなくてはならないのである。しかし、このことは、実は仏教の緻密を極める教学体系があつてこそ成立しうることではなからうか。つまり、積尊の正覚が前提としてあつたればこそである、と思われるのである。であればこそ、禅は敢えてそうした教学の枠組に對してあくまで自由な態度を取らうとするのではないか。そして、教学を学ぶのも自由だ、とことんやってみろ、しかしそれと悟りとは、何の関係もないぞ、というのも、積尊の正覚が、凝縮された一瞬一点の出来事として捉えられているからではないか。積尊においても、悟りは一瞬一点の出来事であつた、と禅は見做しているのではないか。

従つて、禅が狙つたことは、この積尊の正覚の内容を根源Yとし、積尊その人を根拠Xとして、この根拠Xと根源Yとが、厳しく融合して爆発する、根源的根拠的事態Zであつたとは言えまいか。爆発的に融合して輝く、やはり一点一瞬であり、無時間Yも、時間的・空間的・個的Xも、不思議な一瞬一点として輝き出てくる、その時・空が、自・他ともに生きる根源的根拠的Zの事態である、ということを禅は追求して止まないように思われるのである。従つて、そこでは禅者の数だけZの事態がある、と言えるのかも知れない。

その意味で、禅は個性的であると言われるのも当然であるように思われる。しかし、それは何も禅だけには限らないであらう。禅がもし普遍性を一分でももつたら、それは他にも共通であらうからであり、しかもそれは人間に及ぶはずのものであらうから、人間存在が個性的なだけなのかも知れない。がしかし、この人間の個性と禅の個性とは、

絶対に等置できぬものであろう。何故なら、一般的な個性とは、即自的な個我であり、それは本能的・欲望的生命態である我性・私性そのものであろうからである。

二

この我性・私性は、何時か何処かで崩れなければ、我性、私性の戦いの中で、ついにはその餌食となつて行くのであろうか。我性・私性そのものには、救いも悟りもないのであろうか。何故そのように言うかと言えば、先に述べた、己れが己れでなくなる問題、あるいは本来の己れの問題が、筆者には難問だからである。先程、禪が一瞬一点の根源的事態を狙つたのではないかと述べたが、それも大きな誤解であるかも知れないが、それはそれとして、筆者の一つの捉え方であるにすぎないが、問題は、そのことによつて筆者の己れの問題が実は何一つ解決されていないことであり、問題が一層深くなつてしまつたことなのである。更にいえば、筆者の本来の自己とは、筆者には欲望と不安と後悔とに、いらだち続ける己の姿がそれであると思われればかりである。それ以外にあるべき本来の自己の姿など、何処にもないと思われることなのである。もし、それを差し出せと言われたなら、真赤な舌が出るばかりであり、それが見えぬとあらば、思ひの拳固を自身にくらわせるまでのことである。この恥ずべき厚顔の姿としか言い得ない姿が、筆者の奥深くにある真の姿であるとするなら、それから逃れることは金輪際できないことである。この地点において、筆者のそうした私性を材料にして、少し考えてみたいと思うのである。

筆者の我性は、そのように金輪際打ち破ることの出来ない鉄壁の壁のように思われる。がしかし、鉄壁を誇るこの筆者の我性・私性も、一瞬だけでもつまづき倒れることはありはしまいか。否、むしろ、筆者の我性・私性は、一瞬一瞬つまづき倒れ続けているのではないか。筆者の欲望とは、そのようにつまづき倒れ続けている一瞬一瞬の我性に

気づいていて、それに対する叛逆の事態であるのではないか。実際は、絶えず綻び散り続ける鉄壁の我性を支えきれぬいらだちに、我性自身が瞬時瞬時に自身の鉄壁を爆破し続けている、我性自身の自身への根源的叛逆の事態の中にあり続けているということ、それが筆者の欲望の姿ではないか。

欲望がその意味で根源的であるとすれば、不安もまたそうであろう。そうした我性・私性の一瞬一瞬の崩落の恐怖を乗り越えていこうとする、我性それ自身の気づきであるからである。そして、この我性も欲望も不安も、より一層深くは、己れ自身の生命に根源する事態であることは確かである。筆者の目にも、奥深くでは、実は生命自身が生命を一瞬一瞬爆破し崩落せしめていることが、映るのである。しかし、筆者はその崩落・瓦解を認めるわけにはいかない。根源的に敗北しつゝあることを認めたくはないのである。それがいわば、筆者の我性でありそれによって支えられている欲望である。従って、一瞬一瞬深く傷つき倒れ続けているのは、己れ自身の生命であり、我性は生命自身の寸分違わぬ、否それ以上の深き生命の輝きそのものとして、勝利への苦難として、何としてでもあれ、摩り替え続けているいこうとしている筆者の第二の生命なのである。

欲望も不安も、この一瞬一瞬爆発し続けている根源的の生命の中で、育まれ育っている。筆者にとつて、自身の生命とは、そのように一瞬一瞬爆発し続けて深く傷つき倒れ続けて行く、いわば一瞬一瞬輝きながら滅びへと向うものと思われるのである。根源的第一の生命は滅びの輝きである。その滅びを、敗北を、認めたくない意識本能が、やはり内深くに爆発し続ける筆者の欲望の姿であり、それは、根源的の生命の爆発の滅びに、その都度点火された、深き第一の生命への逆襲としての暴爆——第二の生命態なのである。

この自己の深き生命への、いわば逆襲としての暴発としての欲望は、深き生命の滅びを、敗北を認めたくないが故のそれであるが故に、深き生命それ自身に助けを求めるときはできず、必然、他者、他物、他へと向い、それを捲き込もうとするのである。救いを求めるのである。しかし、それを救いを求めることであると認めはしない。救いで

はなく、逆に恩を着せるものとして、他者・他物・他を捲き添えにするのである。

この第二の根源的生命態とも言うべき欲望が、己れの危機・危険に過敏な、また利害・有効性に鋭敏な反応を示す、如何に鋭い目を持つかも、また如何に無謀で暴力的で盲目であるかも、滅びの輝きである第一の根源的生命への叛逆的輝きであることによるのであろう。生命は如何にしても生き延びようとするからである。一方は、滅びつゝ強く輝くものとして。他方は滅びの輝きの、その滅びに点火されてあくまで輝かんものとして。筆者の我性・欲望とは、従って根源的第一の深き生命に根ざした第二の生命である、と言うことであつた。

三

筆者の我性は鉄壁であるが、しかし絶えず崩落する生命への逆襲としてのそれであるかぎり、絶えず叛逆の欲望の炎を燃やし続けなければならなかつたのである。そして筆者の不安も、そうした叛逆の欲望の炎に身を焼けた姿以外の何物でもないように思われる。筆者の不安とは、そうした欲望に身をまかせ、暴爆する欲望の車に乗っている、そのことである以外にはない。欲望に唆されて、その炎とともに舞いあがりつゝある時の、また舞い上つた時の、その叛逆の先陣に立たされた時の、その他への捲き込み抱え込みの先頭にある時の姿であり、そのように舞いあがらされて取り残された時の姿であり、捲き込んだ後の姿である。

筆者にとつて、己れの生命がある意味で即自的な根源態であるとするなら、そしてそれがそれ自身爆発し続ける滅びの輝きにあるものとするなら、さらに己れの滅びに、他を捲き込むことによつて逆襲、叛逆を企てるのが己れの欲望であるとするなら、不安とは、その己れの欲望の先兵と殿將とに、欲望が巧みに配せしめた布陣である。

第二の根源的生命態である欲望は、第一の根源的生命を何んとか維持しようとして、次ぎ次ぎと巧智を巡らして爆

烈し続ける。危険を察知せしめる任務を不安に与え、不安が後ろを振りむいたりしないように勇氣を配備までする。不安は勇氣を得るたびに、自からを失う不安にいつそう戦く。かく、欲望は不安と勇氣の一隊を先後に配し、全軍を一瞬一瞬整え配備して、滅びに抵抗し続け、一進一退を繰り返して、欲望の実現をどこまでも果し続けようとする。滅びの輝き(生命)と滅びに抵抗する点火された輝き(欲望)と、この二つの一体となった生命的輝きが、筆者の本来の自己である。それ以外に、筆者の本来の自己など何処にあるのであろう。

禅は、「あるべき」本来の自己を命じるものであった。この定言命題は、欲望が自からの叛逆の全軍を指揮できなくなり、その重量を支えきれなくなつて発する、あの絶望の叫びを呼び醒す。狂気と錯乱を抱きしめ抱えしめる。恐怖と発狂を呼び、やがて深い昏睡と混濁へと沈んで行く一瞬と一点があるという。この過程は、禅の悟りの過程に似るのであろうか。

四

筆者の欲望は、逆襲としての追いつめられた者としての輝きであった。生まれたときから、死ぬときまでの、意識されてもされなくとも、滅びに点火され続ける生命態であった。不安と勇氣で、攻め際、逃げ際を固め、肉体を励まし、精神を奮わせ、密偵を放ち、全軍を閃光と放つて輝く煌きであった。生命の震えは、欲望のそれであった。心の震えは欲望のそれである。心の鼓動は、欲望のそれであった。すべて、今となれば、生命の滅びを・敗北を肯じない、滅びの生命に差し招かれて燃えたち、暴爆する欲望の一瞬一瞬の震えであり、鼓動であった。

こうした欲望の輝きの中で、筆者の滅びの輝きは無力である。徹底して非力である。それ故、欲望が燃え立ったのである。しかし、この滅びの輝きに欲望の輝きを点火せしめているのは、筆者の我性、私性なのである。両者を仲介

しているのは、我性であり、生命の滅びの輝きの、その輝きを生命自身の輝きとして、より一層強いものとするために、我性がそれを引き受けて滅びに抵抗していたのである。従って、我性は、生命を強い生命力とする。しかし、それは本当のところは、我性そのものの強さでしかなかった。滅びに抵抗する強さである。敗北に屈することなく、それを潔しとしない、生命の微少の傾きであった。

筆者の我性と欲望と不安とは、ほぼ以上なことが基本である、と思われた。勿論、欲望の全体像を求めようとしたのではなく、従って、他に向う、他を抱き込む問題、むしろこちらの方が重要と思われるのであるが、一切触れることを避けた。それを分析する余裕も力もないことが原因であるが、何よりも根幹と思われる一点・一線を訪ねあてたかった、絶えず後悔とともにある筆者のいらだちの為せる業なのである。又、素直には、禪の言う、「本来の自己」、「あるべき本来の自己」、「今、学道の人は自心の中に向って悟らずして、即ち心外に於いて相に著して境を取る。皆な道と背く。」(禪の語録⁸、黄檗山断際禪師希運(??八五〇?)『伝心法要』入矢義高訳注、筑摩書房、一三頁)とは、一体どういうことであり、どうしてなのか、といったことを考えてみたかったからでもある。

五

筆者は、生命の滅びの輝きを命題のようにして述べてきたが、それは先ず第一に私は私の生命としてあるからであり、その生命は誕生と同時に死滅へと運命づけられており、しかもその死滅への道は、生命の成長ともいべき事態とともにある、と考えられたからであり、それを輝きと表現してみたわけである。そしてその輝きを二重のものとしたのである。

この両者とも、生命の輝きであるには違いなく、それ故両者とも筆者の根源なのである。しかし、一方は死滅を運

命づけられている生命それ自身の輝きであり、またそれは自身のそうした根源を照し出す、それ自身のための輝きであった。つまり、生命の滅びの過程そのものは、滅びへの過程であるとともに、それ自体根源的生への過程でもあったのである。しかし、一方筆者の私性は、それを聞きとらないで、滅びの方だけを受信してそうした生命に叛逆して、結局は生命自身の輝きとはならず、逆に滅びそのものを増強させておきながら、それを、己れの輝きとするという、いわば、己れという畏にはまっけてしまうものであった。

確かに与えられたものとしての生命は、やがては滅びる。その滅びるものとしての生命が、真に望んでいるのは一体何であるのか。深い絶望であるのであろうか。あるいはそうであるかも知れない。深い歓喜であるのであろうか。あるいはそうであるかも知れない。しかし、己れのそうした生命の奥深くには、そうした問いでも手の届かない、己れ自身にも気づかれない、何かがあるのではなからうか。それが一体光であるのか闇であるのかわからないが、それが真の根源であるのであろう。滅びの輝きが、生命自身を輝かせる輝き \parallel 光であるとするなら、筆者はその光を頼りにして、その見知らぬ真の根源へと進み行く他はないのである。

かくて、筆者にとつての「あるべき己れの本来の面目」とは、筆者にとつては今や「己れの真の根源」であることになったのである。そしてまた、そこでは確かに、己れが己れでなくなっている、のだと思われる。本来の面目の、いわば無ともいふべき時空であると考えたいわけであり、またそうした無・時空の蔽存を信じたいわけであるが、しかしそれはあくまで実践的課題であるだけに、それが如何に個性的なものとなるのかも、信じたいのである。たしかに、見性の一点一瞬の狂いもないはずの以心伝心が、一点一瞬の狂いを生みだし続ける、貴重な原点であることを信じたのである。そこには、創造や歴史に関わる何かがあると思うからである。

禪は、根源が生きていることである、と筆者が考えるのは、自身の一つの信仰・囚れのようなものである。そして、全てを失ったときしか、根源は生きられぬのかどうか、それには何か条件のようなものが必要なのかどうか、全てがあ

ってはいけないのかどうか、決められた一定の範囲があってはどうかなのか、筆者には、いずれもが根源が根源を訪れ問う入口のように思えるのである。己れが己れでなくなることの問いとして、己れのすべてを失ってもなおあるものへの問いとしてである。